令和7年度　学校評価　学校関係者評価書

三木市立口吉川小学校

1 学校教育目標

学びの楽しさ　あふれる子の育成

2 本年度の重点目標

・児童・教職員にとってワクワク・ドキドキできるような、魅力ある学校づくりを進める。
・基礎・基本の定着を図り、自らすすんで求め、主体的に学習に取り組む態度を育成し、対話的、深い学びにつなげる。
・思いやりの心をもって、互いの良さを認め合い励まし合う態度を育成する。
・特別支援教育における組織的支援体制づくりと啓発促進を図る。
・心身ともに健康で、粘り強く取り組み、やりぬく児童を育成する。
・教育の専門家として、指導力・組織力の向上に努め、積極的に研鑽を積む。
・小規模校の特性を生かし、保護者・地域の願いを大切にし、信頼される安全で安心な学校づくりを進める。

3 自己評価結果（達成状況）【 A：達成している　B：概ね達成している　C：あまり達成していない　D：達成していない 】

評価の観点	評価項目（取組内容）	取組（達成）の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
学習指導 【平川・北村】	○未来を創る学力（主体性・協働性・創造力）育成 ・“みらい”の時間を中心とした探究を通して、未来を創る学力である資質能力の向上や素地育成を目指した授業づくり ○一人ひとりを見取り、個別最適化された学びや協働的な学びがある授業づくり ・学習規律と基礎・基本の定着	・1・2年生の生活科では、栽培や町探検、自己の成長の振り返りなど、多角的な学習活動を展開してきた。その中でも、特に工作的な活動において優れた成果が見られた。みらいヤードから自由に材料を選び、試行錯誤しながら自分のアイデアを形にする姿が多く見られ、素材に関わりながら探究を深めることができた。 ・3～6年生は総合的な学習の時間に個人探究の時間を設定し、年間50時間程度実施した。昨年度の反省を生かし、日本画や民謡等の内容について、地域人材を積極的に取り入れた。 ・研究主題の視点を「見取りと評価」とし、OPPとルーブリックの活用を中心に進めてきた。また、10月に自主研究会を開催し、市内外の先生方等から有意義な意見をいただくことができた。 ・未来を創る学力について、アンケート分析等を行い、成果と課題を検証し、次年度へ繋げる取組を進めた。 ・学習規律については、担任と児童が共に創り上げるものとして教職員間で共有している。その中でも、返事の仕方や姿勢といった共通の課題が見えてきている。 ・今年度も基礎学力定着を目指し、AIドリルを活用した修行の時間に取り組んだ。	B	・1・2年生の合同生活科については、今年度取り組んだ町探検や自己の成長、工作的な活動の成果を基盤とし、次年度はそれらをより系統的で質の高い学びへと深化させる。工作的な活動を効果的に取り入れながら、活動全体の質を向上させるためのさらなるカリキュラムマネジメントを推進していく。 ・3～6年生の個人探究では、児童の興味が多様化しているため、公民館や地域人材の開拓が求められる。そのために、1学期の探究見つけの時に、意図的に地域人材との交流の場を設定する等の手立てをしていく。 ・次年度は「探究で培った学びの教科学習への転用」について研究予定である。学びのサイクルを教科学習に意識的に取り入れることや、児童が選択できる場面を意図的に創る等の具体的方策を行っていく。 ・共通の課題として挙げられている、返事の仕方や姿勢について、共通理解をする場を設け、子どもたちの学びの土台が定着できるようにする。 ・協働的な学びや個別最適化された学びをさらに工夫する取組を進める。	・「みらいの時間」における探究活動は、児童の満足度が非常に高く、地域人材の活用も適切になされている。今後は、今年度の反省を生かし、発表会の形式（場所や方法）に工夫を凝らすなど、児童一人ひとりが達成感を味わえる場づくりを継続されたい。 ・「個人探究」と「協働的な学び」のバランスを考慮したカリキュラムマネジメントや、探究の教科学習への転用という改善の方策に期待する。 ・多数で意見を出し合うことを多く取り入れるなど、協働的な学びの工夫に期待する。 ・みらいフェスティバルで児童の様々な探究的活動を見ることができた。児童の興味関心が多種多様なため、教員の指導・支援は大変だと思われるが、児童の夢の実現に向け、さらに指導・支援の工夫を図りながら、児童のより良い学びとなるようにしてほしい。 ・評価Bは妥当である。
道徳教育 人権教育 【中上・平川】	○自他ともに尊重できるこころの教育 ・道徳の時間の充実 ・親子人権学習をはじめ、さまざまな教育活動を通した人権教育の推進 ・異年齢集団による主体的・創造的な取組の充実	・対話を中心とした授業展開にするために、児童の考えを可視化したり、児童の生活に返す問いを投げかけたりした。その結果、自分の考えをもち、道徳的価値を深めることができる児童が増えている。一方、行動と結び付けにくい児童もまだ見られる。 ・親子人権学習に向けて、講師を招いた研修の機会を設定し、現在の人権課題について学びを深めるとともに、より効果的な授業展開について学ぶことができた。 ・「人権週間」を設定し、児童が人権について考えるために、人権作文の朗読や図書委員が人権に関する絵本の読み聞かせを行った。 ・固定化された人間関係の中で、改めて児童が自己開示したり、友だちの新たな一面を知ったりするために、自分の「取扱説明書」を書き、掲示した。それに対して、お互いにコメントを書き合ったり、保護者からもメッセージを書いてもらったりした。 ・親子人権学習のふりかえりや板書を掲示することで、他学年の学習内容についても知る機会を設けた。 ・異年齢集団活動は、6年生が様々なアイデアを出して実施内容を工夫し、全校生が協力して楽しく活動できた。また、低学年の意見を取り入れ、全員が楽しめる内容を考えることで、相手を思いやる気持ちが育まれた。	B	・一人ひとりの児童の言動をつぶさに観察し、規範意識や善悪の判断を中心とした良い行動が見られたときに価値づけたり、意味づけたりする。また、全教育活動を通して人権感覚を高める指導を推進する。 ・人権教育における親子人権学習について、6年間の系統性が感じられにくいため、再検討する。 ・異年齢集団活動の実施方法については、今年度の方法を継承するとともに、新たな活動を行うことで、豊かな心を育む。	・自分の「取扱説明書」などの取組により、相互理解が深まっている点を高く評価する。 ・改善の方策に掲げられた「親子人権学習にかかる6年間の系統性」については、教員の流動性による教材の重複を防ぎ、学年段階に応じた内容の深化を図るために不可欠な視点であり、早急な再検討を望む。 ・地域や親子で学ぶ機会を捉え、児童の年齢に応じた継続的な人権意識の向上に努められたい。 ・情報モラル教育については、「一度発信したものは取り戻せない」というデジタルタトゥーの怖さやAI・フェイクニュースへの対応、さらにSNS使用の際の人権に配慮の必要性など、時代に即した正しい活用方法の指導の徹底を期待する。 ・評価Bは妥当である。
生徒指導 【山本・小山】	○児童一人一人に寄り添う生徒指導 ・全教職員による児童の共通理解 ・いじめ、不登校に関する組織的な取組 ・基本的な生活習慣と規範意識の確立	・学期毎に「心の健康観察」（生活アンケート）を実施し、全員にヒアリングを行うことで、児童一人ひとりの実態を把握するよう努めた。さらに、得られた情報を、SC、SSWを含む教職員で回覧し情報共有を図った。 ・校務支援システムの「気づき」を使い、担任、SC、SSW、管理職、養護教諭等が閲覧・記入することで、不登校傾向のある児童や配慮が必要な児童への組織的な関わりを進めることができた。また、不登校・いじめへの対応等に関する各種マニュアルや研修内容の伝達講習を実施した。 ・長期休業明けに、児童が早く学校生活のリズムを取り戻せるよう、「生活振り返りカード」による自己評価及び保護者・担任によるチェックを実施した。生活目標では、児童集会などで担当委員会が啓発したり、給食の時間に放送委員が毎日アナウンスしたりすることで基本的な生活習慣の確立を図った。	B	・今後も、学期毎に「心の健康観察」を行う。アンケート内容や方法、時期、回数などについて検討し、児童の内面理解により資するものにしていきたい。回覧後、職員がお互いにアドバイスするなど、さらに活用していきたい。 ・不登校傾向にある児童、配慮が必要な児童に関しては、校務支援システムの「気づき」を活用し、全職員、外部専門家・機関などが、より効果的に関われるようにしていく。 ・児童自身がきまりや生活習慣の意味を考えるために、生活目標や「口吉川っ子のくらし」などを児童会・委員会などがともに考える機会をもつ。	・「心の健康観察」（生活アンケート）の回収後に行っている全児童へのヒアリングや、SC・SSWとの組織的な連携体制が機能している。 ・アンケート後の聞き取りを通して、児童に対し、丁寧なかかわりが行われており、とてもありがたい。 ・アンケート分析においては、少人数校の特性を鑑み、全体の割合だけでなく、一人ひとりの経年変化（個の変容）を細やかに見取る評価手法を検討されたい。 ・不登校児童ゼロが続いていることは嬉しいことである。しかしながら、気になる児童はいるということなので、引き続き児童の心に寄り添いながら、児童にとって学校が楽しい場所であり続けてほしい。 ・評価Bは妥当である。
特別支援教育 【黒田・中上】	○個に応じた教育の実践と体制づくり ・個に応じた適切な指導及び必要な支援 ・交流及び共同学習を通した相互理解の推進	・個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成し、全職員で共通理解しながら、全児童を育てた。また、支援の必要な児童の保護者との連絡を密にしたり、専門機関に相談する機会を設けたりして、個に応じた指導をした。 ・ユニバーサルデザインの視点を大切にし、教室環境を整える、学習のルールを決める、授業の見通しをもたせる、特性に応じた支援をする等、工夫や配慮をしながら、児童が学習しやすいように工夫した。 ・にこにこウィークでは特別支援学級発信で活動したり、特別支援学級と通常学級との交流授業を行ったりして、相互理解や啓発を図った。日常的に全児童が関わり合うことで、相互理解を深めた。	A	・今後も児童の実態をより的確に把握し、保護者との連携を密にして、個に応じた適切な支援に努める。特に支援が必要な児童については、より細やかな支援を行うために、専門機関との連携を図り、教育相談の内容や発達検査結果を共有し、よりよい支援を実行していく。そして、個別の指導計画や個別の教育支援計画を随時更新して共有し、児童が充実した生活を送れるように指導・支援をしていく。 ・特別支援学級の児童と交流学級や他学級との合同授業、特別支援学級発信の活動、日常的な活動などを通して、引き続き相互理解を深めていく。また、教職員も積極的な関わりを続けていく。	・個別の指導計画に基づき、全教職員で全児童を見守る体制が確立されている。 ・少人数ならではの利点を生かし、一人ひとりに応じた細やかな支援がなされている点を評価する。 ・今後も、引き続き特別支援学級に在籍している児童と、通常学級に在籍している児童との交流を通して、全児童が自然に多様性を認め合える環境を維持されたい。 ・評価Aは妥当である。
安全・防災教育 【近都・小山】	○安心・安全な学校づくり ○自他の命を守るために主体的に行動できる児童の育成 ・防災教育の推進 ・安全指導の実施 ・健康教育の充実	・ドライブスルーでより安全に保護者に引き渡せるよう、手順を見直した。また、体育館に不審者が現れる想定の避難訓練をして、危険な状況をシミュレーションし、避難ルートの見直しをした。 ・火災対応避難訓練では、火事を発見したら大声で知らせることの大切さを伝え、近隣教室や職員室に知らせる訓練を行った。 ・地域総合防災訓練では親子や地域の方と一緒に学ぶ機会を設けた。備蓄品を開封し、使い方を考える材料にした。 ・生活リズムやICT機器と健康、歯と口の健康など、発達段階に応じて保健指導を行った。また、自分と相手を大切にし、自らの心身の健康を守るための生命（いのち）の安全教育やSCと連携し、SOSの出し方に関する教育やアサーション（自分も相手も大切にする自己表現）など心の健康に関する教育を昨年度よりも充実させて行った。 ・感染症予防として、楽しく手洗いができるように手洗いに関する取組（あわあわ手洗い大作戦）を行い、意欲的に手洗いを行う児童の姿が見られた。	A	・日々の暮らしの中や学習の中に安全や防災の視点を取り入れ、児童が自ら危険回避の行動をとれるような実践力を養う。また、自分だけでなく他者の安全にも気を配れるような心情を育成する。 ・児童がよりよい健康習慣を確立できるよう、保護者への情報発信と啓発を強化し、家庭とともに推進していく。 ・生命（いのち）の安全教育や心の健康に関する教育は、養護教諭やSCの専門性を生かし、今後も継続的かつ系統的に行っていく。	・地域と連携した防災訓練や、児童がSOSの出し方に関する教育など、多角的な取組を評価する。 ・防犯ブザーの音が確実に鳴るように、電池切れ問題については、学校での点検を継続するとともに、家庭への啓発を強化されたい。 ・一人で登下校する児童の安全確保など、通学路の危険箇所について地域や警察（交番）との情報共有を一層密にすることを求める。 ・火災、悪天候、地震などの様々な災害を想定した避難訓練が計画的に進められている。本年度の地域防災訓練からもその様子が分かり、児童に安全・防災に関する能力が備わっている。 ・評価Aは妥当である。
学校の組織力の向上 教職員の資質能力の向上 【校長】	○児童に寄り添い、共に歩む教師 ・小規模校の良さを生かしながら、主体性・協働性・創造力を育む授業づくりの研修や、専門性向上に向けた研修会参加の促進 ・学びを深め、広げるための効果的なタブレット活用 ・働きがいややりがいを感じる職場づくりの充実 ・子どもに向き合う時間の創出及び、ワークライフバランスにつながる学校業務改善の推進	・常に児童一人一人に寄り添い、共に歩もうとする意識を高く持ちながら、教育活動に取り組んだ。 ・児童の主体性・協働性・創造力を育むために、児童自身が学びを楽しむことができるよう、探究学習中心の研修を教職員で積み上げた。特に“みらいの時間（探究学習）”の「見取りと評価」に視点を当てた自主研究発表会の参観者や講師からの貴重な意見をもとに、研鑽を積んだ。児童アンケートの「学校生活が楽しい」の項目の評価が伸びていることからも成果は出てきている。 ・タブレット活用についての研修会に積極的に参加し、その学びが広がるミニ研修会をもった。また、小規模校の良さを生かした実践校へ視察に行き、小規模校の学びをより豊かにするよう積極的に研修に取り組んだ。 ・“みらい”の時間、わ・わ・わ班活動、学校行事など、教職員が一つになって取り組むことでやりがいを感じたり、教職員同士がフォローし合う安心の環境を築いたりすることができた。 ・本年度から校務支援システムが一新され、戸惑いがあったが、教職員同士の教え合いで機能し始め、スムーズに校務が進むようになってきた。	B	・探究学習で培ってきた学びを教科指導に生かす研修や、小規模校の良さを生かした取組を進める先進校視察、未来を創る学力育成など、教職員の資質能力育成のための研修を計画的に進める。 ・ミニ研修会や通常授業公開を気軽に行うことで、研修を身近なものにする。 ・教職員が一つになって取り組んだり、フォローし合える環境づくりを維持するためにも、ゆとりを感じる職場づくりに努める。具体的には、校務支援システムの有効活用、業務の精選、行事・教科指導において学校外部の力を借りるなどして、業務改善を進める。	・自主研究発表会や校内ミニ研修会の実施など、教職員が一体となって研鑽を積む姿勢を評価する。 ・特にICTの有効活用や校務支援システムの導入による業務改善は、児童と向き合う時間の創出に繋がっている。 ・先進校視察等を通じて、今後も小規模校の良さを生かした教育の質の向上と教職員のワークライフバランスの両立を推進されたい。 ・人権教育において親子人権学習の系統性について、さらに研修を進めてほしい。 ・児童アンケートの「学校での生活は楽しいですか」のポイントが、昨年度より上がっていることは素晴らしい。引き続き児童にとって、魅力のある学校になるように努めてほしい。 ・評価Bは妥当である。
家庭・地域との連携 【教頭】	○地域とともにある学校づくり ・タイムリーな情報発信 ・学校及び地域が共に有益となる連携した教育の促進	・学校行事や児童の様子を詳しくホームページで紹介し、多くの人に学校の様子を伝えた。また、毎月の学校通信では、保護者や地域に学校の取組や考えを紹介することで、保護者や地域から理解を得ることができた。 ・各学級では通信を発行することで、学級での児童の様子や教育活動に対する担任の思いや願いなどを伝え、保護者と意思疎通することができた。 ・老人クラブとの交流、地域人材バンクを活用した「読み聞かせ」や“みらい”の時間の取組、地域ゲストティーチャーを招いた学習など、地域の教育力も生かした学習に協力いただき、児童に豊かな教育活動を体験させることができた。 ・学校行事では、保護者や地域の方々に来校いただくよう積極的に案内するようにした。今年度も、学習発表会では、児童の発表に対し、惜しみない拍手をいただくとともに、温かい感想を多く寄せていただくなど、児童や教職員の自信にもなった。さらに、三木市手をつなぐ育成会「じゃがいもの家」との交流を通して、児童に福祉に対して、意識をもたせるようにした。	A	・「地域とともにある学校づくり」を進めるために、これからも丁寧なホームページ・学校通信・学級通信の発信を教職員全員で行い、学校の取組を伝えることで、保護者及び地域との結びつきをさらに強くしていく。 ・地域人材バンクの登録者の増加や活用を進めるために、人材バンクを整理するとともに、積極的に教育活動を紹介して学校が求めていることへの理解を深められるようにする。そして、登録者が安心して児童の活動に参加することで、児童と登録者がお互いに有益となる活動を探る。 ・引き続き学校行事を保護者や地域の方々に案内し、多くの人に児童の様子を生で伝える場を提供することで、開かれた学校づくりを目指す。	・ホームページや学校通信による発信は充実しており、学校の様子がよくわかる。特に行事では、児童の成長がうかがえ、元気がもらえた。 ・新たな地域人材を活用しながら教育活動を進めている。さらに、学校の門を広げ、多くの人が学校にかかわるきっかけづくりを推進し続けてほしい。 ・地域人材がより気楽に、かつ有益に学校活動に関われるよう、登録者のさらなる開拓と交流の深化を期待する。 ・課題となっている「少人数での移動手段（バス利用の規定）」については、カリキュラムの質に関わる問題として、引き続き市への働きかけや代替案の検討を継続されたい。 ・評価Aは妥当である。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・学習指導や生徒指導などの各項目において、具体的な取組状況に基づいた自己評価がなされている。評価の難しい『みらいの時間（探究学習）』においても、ルーブリックやOPPシート（ポートフォリオ）を活用して児童の学びを見取ろうとする手法は、評価の信頼性を高めるものである。また、教職員だけでなく保護者や児童のアンケート結果を突き合わせて多角的に分析している点も適切である。
・自己評価の結果は委員の目から見ても概ね妥当である。数値化されたデータのみならず、児童の『学校が楽しい』という実感の向上など、質的な変容を評価の軸に据えている点は、魅力ある学校づくりを目指す本校の方針に合致している。
・アンケート結果の中には、教職員と児童にずれを感じるところもある。さらに分析を進めるとよい。例えば、児童一人ひとりの変容を経年変化で細やかに見取る分析方法を取り入れるなどの工夫を望む。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価